日本未病システム学会雑誌　15(2)：300-302，2009

研究論文●20

動物のメンタルヘルスにおける ホメオパシー療法とクォンタムゼイロイド QX-SCIOの活用について

笹木眞理子*

1．はじめに

人間においてメンタルヘルスの重要性が注目される中，日々の診療において，問題行動をはじめ動物たちにもメンタルヘルスの重要性を実感することが多い。言葉を発することのできない動物たちに，クォンタムゼイロイドQX-SCIO(ホメオパシー理論を応用した最新鋭のエネルギー測定・修正装置：以下，QX-SCIO)とホメオパシー療法[1)]を施し，特に有効と思われた例を紹介する。

2．目的

ホメオパシーはメンタル面にもアプローチできる療法であり，9,000以上の物質・感情・精神・ホメオパシーレメディー[2)]などの情報に対する微弱エネルギーの反応を高速で測定するQX-SCIOとともに使用し，問題行動だけでなく皮膚疾患や腎不全など治癒の一助となったケースを紹介し，ホメオパシー療法とQX-SCIOの有効性を検証することを目的とする。

3．方法

1．実施期間

平成19年1月から平成21年6月の間に，初診でホメオパシー動物相談を受けた動物クライアント306件。

2．ホメオパシー動物相談初診時主訴分類

1）**健康管理**：主症状はないが，病気予防などをホメオパシーで実施

2）**問題行動**：咬みつき・吠える・飛びつき・怖がりなど

3）**皮膚疾患**：湿疹・アレルギー・外耳炎など

4）**循環器疾患**：心臓病など

5）**呼吸器疾患**：咳・鼻炎など

6）**消化器疾患**：口内炎・下痢・肝機能低下など

7）**泌尿器疾患**：腎不全・結石・尿漏れなど

8）**腫瘍**：乳腺腫瘍・血管肉腫・リンパ肉腫など

9）**神経系疾患**：てんかん・水頭症など

10）**その他**：甲状腺機能低下・関節の腫れ・FIV・FIPなど(FIV：猫エイズ，FIP：猫伝染性腹膜炎)

3．ホメオパシー動物相談の実施方法

1）**稟告**

主訴，これまでの治療方法，ワクチン歴，食事内容，性格，飼育環境，同居動物など，6ページにわたる質問票をもとに，ホメオパシー的相談を実施する。

2）**QX-SCIOでの測定**

QX-SCIOを用い，9,000以上の物質・感情・精神・ホメオパシーレメディーなどの情報に対する微弱エネルギーの反応を高速で測定する。

3）**レメディー選択**

稟告とQX-SCIOのデータをもとに，クライアントの疾患・症状に対するホメオパシーレメディーを選択する。

*笹木アニマルクリニック(往診専門)

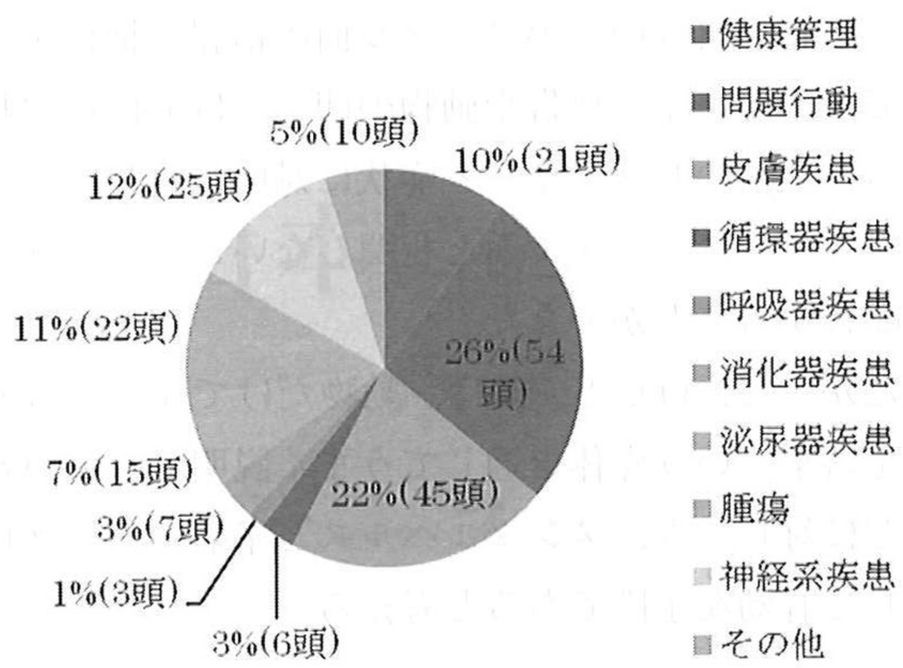

図１　犬(208頭)の主訴

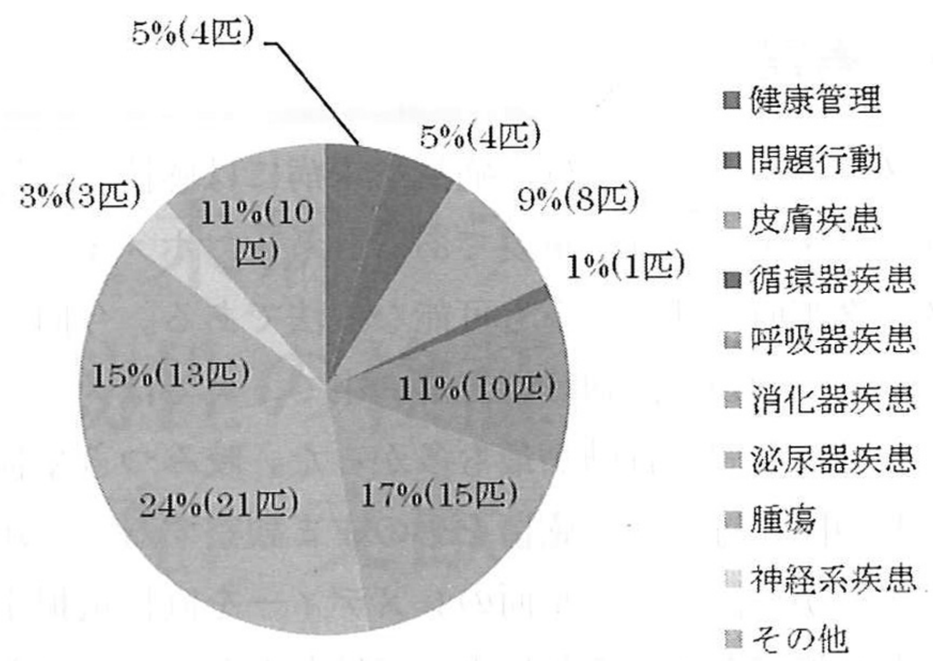

図２　猫(89匹)の主訴

4．結果

1．ホメオパシー動物相談における初診時主訴について(図１，２)

1）**健康管理**：犬21頭，猫４匹

2）**問題行動**：犬54頭，猫４匹

3）**皮膚疾患**：犬45頭，猫８匹，その他２匹

4）**循環器疾患**：犬６頭，猫１匹

5）**呼吸器疾患**：犬３頭，猫10匹

6）**消化器疾患**：犬７頭，猫15匹，その他２匹

7）**泌尿器疾患**：犬15頭，猫21匹，その他１匹

8）**腫瘍**：犬22頭，猫13匹，その他１匹

9）**神経系疾患**：犬25頭，猫３匹，その他２匹

10）**その他**：犬10頭，猫10匹，その他１匹

2．QX-SCIOを使用することで治療の一助となったケース

1）猫における皮膚の瘙痒・脱毛のケース

・５歳，雄猫(去勢済み)，同居猫２匹。主訴：腹部の瘙痒，発赤，脱毛。

・他の動物病院で種々の検査(細菌・真菌培養，甲状腺機能，アレルギーなど)を受け，抗生物質・副腎皮質ホルモンで一時的に良くなるが，投与をやめると再発する。

・甲状腺ホルモン・インターフェロンなどを投与したが改善がみられなかった。

・相談会室ではおとなしく，飼い主からは，他の猫との関係も良好でお互いグルーミングをして仲が良いと稟告を受けたが，１回目の相談会の日にQX-SCIOを実施すると，恐怖の値が高く，猫間の問題かわからないが，恐怖の感情を中心にレメディーを選択した。

・２回目以降の相談会では，恐怖の値は下がっていたので皮膚のかゆみや炎症に対してのレメディーを選択するが，発赤など少し改善はしているものの，完治には至ってない。

・数回の相談会後，QX-SCIOが嫉妬の値を高く示した。飼い主は恐怖や嫉妬の感情をもっていることが理解できないと言っていたが，嫉妬のレメディーを選択し，完治に導いた。

2）猫における慢性腎不全のケース

・15歳，雌猫(避妊済み)，同居猫１匹。主訴：慢性腎不全，食欲不振，体重減少。

・他の動物病院で慢性腎不全と診断され，点滴を受けながらも体重減少，食欲減退で余命数カ月と宣告された。

・初回時は体重も２kgを下回り，危機的状態であった。QX-SCIOが恐怖の感情を高く示したため，いままでに恐怖の体験はないかと聞くと，阪神大震災のとき飼い主が留守をしていて１匹で３日ほど過ごしたとのことであった。

・恐怖のレメディーを中心に腎臓サポートを行うことで，体重も3.4 kgと元に戻り，２年以上健在。

3）犬における軟便のケース

・13歳，雄犬(去勢済み)，同居犬１匹。主訴：軟便。

・他の動物病院で軟便に対し，種々の検査(血液・糞便・アレルギーなど)を受け，療法食などを試したが改善しなかった。

・犬の性格として，ボスタイプで威張っていて，自分の好きなことをすると稟告を受けたが，QX-SCIOは心配や不安の感情の数値が高かった。

・不安のレメディーを処方することで軟便は改善した。

5．考察

ホメオパシー療法では，病気や未病には感情や精神というメンタルな部分が重要であると考え，ホメオパシーはメンタル面のサポートも可能な療法である。今回，ホメオパシー動物相談初診時主訴の中で，犬ではメンタルケアの必要な問題行動が最も多かった。咬みつきや怖がりなどの問題行動は，感情をそのまま観察することができることから，メンタル面のレメディーを直接選択することが可能であり，それによってほとんどのケースが改善した。

しかし，今回紹介したケースは，症状に対するレメディーや，飼い主の稟告や動物を観察することで選択した感情のレメディーでは，症状の改善が良好ではなかったものである。QX-SCIOを使用することで，話すことのできない動物自身の真のメンタル面の情報を把握することができ，飼い主の稟告や動物の観察だけでは選択し得なかった感情のレメディーと症状に対応したレメディーによって，一見メンタル面と相関しないと考えられる主訴を改善することができた。

したがって，QX-SCIOは，動物だけでなく，自分の感情を言葉という媒体を通じてうまく説明できない乳幼児などに対しても，メンタルヘルスと未病へのアプローチとして有効な手段であると考える。

文　献

1）サミュエル・ハーネマン：医術のオルガノン(第6版)，ホメオパシー出版，東京，2007.
2）由井寅子：ホメオパシー in Japan，pp. 20-21，ホメオパシー出版，東京，2002.